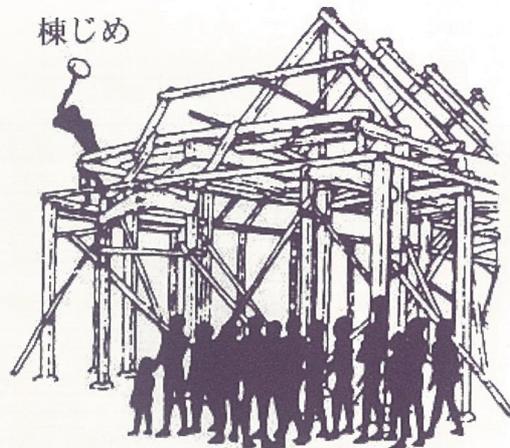
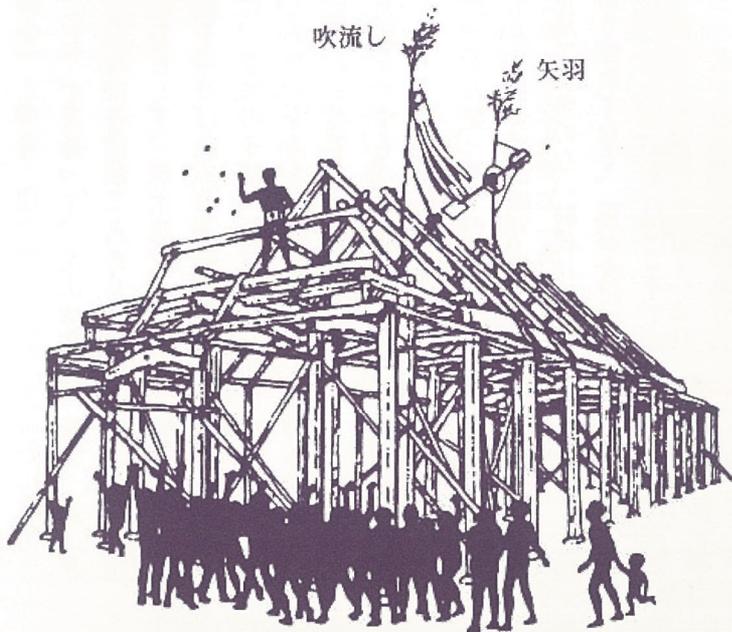


# 生活の伝承 23

発行者 民家園のつどい  
 会長 太田 隆 夫  
 発行所  
 福島市五老内町3番1号  
 福島市教育委員会文化課内  
 民家園のつどい事務局  
 TEL(024)535-1111 内線5374



火伏せの儀式

## 『棟上げ』

加藤 重 芳

民俗調査はこれまで稲作農民を中心に、定住民の調査に偏り移動する職能人。大工・商人・芸人。宗教家などについては不備な点が多い。工(たくみ)は巧なり、工に六工あり、木工(こだくみ)・土工・石工・金工・革工・草工とする。工の頭を大工という。匠は官位である。

棟梁はもと氏の長者を指したが、後大工の頭を棟梁と言うようになった。棟梁は僧・神・修験等の職業宗教家を頼まず自ら上棟祭を司る。その様子は俗人に理解しがたい独特なところがある。

先ず、棟の東端に矢を番えた弓を立てる。

矢は鬼門に向けて邪鬼を破る。手板に鶴。亀の古詳。又は鎬矢。ことに龍神を祭って火の災を防ぐ。これが「火伏せ」である。

西の端に立て五色の吹流し、これは陰陽五行で東西南北中心を示す。次に扇子三面、これは「末広がり」合せて円満を示す。次に「おかめ」の面、これについて俗説がある。

おかめは、名工「左甚五郎」の嫁といわれる。

一書に曰「あるふみにいわく」甚五郎、寺の建っているとき誤って柱を一本短く切ってしまった。困っているとおかめがほかの柱も短く切って揃えればよいと教えたという。

一書に曰、柱と桁の間に肘木を挟めば強く見映えも良くなるよと教えた。

一書に曰って棟持柱を切ってしまったところ、おかめが墓股(かえるまた)の工法を教えたという。

又、一書に曰、大斗・肘木。拵組みも又然り。

甚五郎は此事が世に知れて己の名声が失はれん事を恐れておかめを殺してしまった。

後、これを悔いて、上棟祭におかめの供養をするといわれている。

この説何ぞや、怪むべきものなり。  
愚按ずるに

皇孫瓊杵尊(にぎのみこと)が天降って、大山津見神の娘を、后(きさき)に求めたところ、大山津見神は吾に娘二人あり。二人乍(ながら)差上るべしとしたが、尊は姉は醜しとして、妹木花咲(さく) 耶姫のみ召された。大山津見神曰く、姉磐長姫を召せば皇孫の子孫は磐の如く堅く、長かりしものを妹姫のみ召された故に、皇孫の子孫の齢は花の如くはかなかるべしと申された。磐長姫は醜(しこめ)女をみると喜ばれるので建物の齢長く、堅固などを願っておかめの面を供えるのである。

おかめの説話は神社建築の発達を示すものであるが、古き伝説(いいたえ)なればさもあらんか。

次に機織の箴(おさ)・麻糸、女の髪・紅・白粉、女の髪、紅・白粉は形代であり、箴・麻糸は女の技であり、女性が織り出す織物は古代には最も高価な産物で貢物として、又、市場で貨幣のない時代には経済の中心であった。

古代女性中心の母系家族があり嫁取でなく、男が女に通う妻婚(つまどい)の遺風があったのも、この女性に経済力があればこそであった。

舟霊(ふなだま)の話

陸の民が家を建てるのに対して、海の民は舟を造る。新造の舟に守護神の舟霊を祭る行事は棟上祭によく似ている。

舟霊の祭神は大綿津見(おおわたつみ)神(海の神)の娘で、皇曾孫(ひこ)。彦火火出尊の后となった豊玉姫と玄孫(やしやこ)。鶉草葺不合(うがやふきあえず)尊の后玉依姫を祭る。

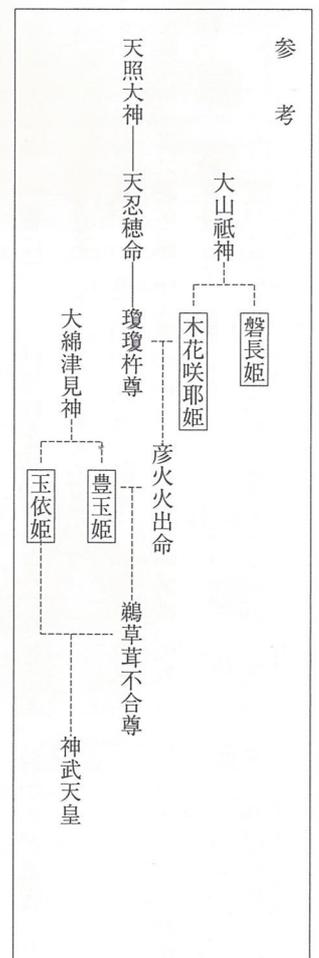
舟が完成したとき舟の帆柱を立てる穴(室という)に、女の髪・男女一対の人形・賽二個・鼠の糞・一文船銭十二枚を納めて帆柱を木槌で三度打って魂を込める。

この意味するところは髪・人形は形代。  
賽は神に運を任せて幸運を願う。

鼠の糞は、鼠は舟の危難を知らせるといふ伝承がある。

銭十二枚は三途の川の渡銭で、一旦死んで三途の川を渡っても生き返って来るように、帰りの渡銭を準備したものだと思われる。

参考



いわゆる

「火伏せ」について

男根を祭って火災防止を願うこと。

わずかに「龍のひげ」を付けて龍神を招くというのも牽強附会の説といふべきで、道祖神と同じく邪気を祓い、家内安全・子孫繁栄を願うもので、先の棟上げと同様、神仏・修験を頼まない全く世俗な行事である。

先に述べた母系家族の存在を考えると、これは女の家族に若く元気で働き付けることは後世の後知恵であるまいか。

卑諺に

聶三代続けば分限(金持)になる。  
敢えて異説を述べて後考を待つ。



桜本寺山門の葺股



旧小野家複製

# 明治時代の芝居小屋(国指定重要文化財) 旧広瀬座公演での鑑賞会から

中 橋 淳志郎

旧広瀬座は、明治二十年梁川町(広瀬川南畔)に建てられ、現存する東日本最古の芝居小屋で、屋内舞台廻りなどの改造はなく、明治時代の雰囲気と地方常設芝居小屋の特徴を色濃く残し、興行施設の機能を果して来しました。

その後、福島市民家園へ移築復原され(平成六年)、旧広瀬座での公演は毎年秋に開催されているが、市還暦記念事業で開講している「マスターズ大学」終了の同期生団体である「六期生会」では、設立当時から旧広瀬座公演を芸術鑑賞会として年間行事に取り入れ、会員との交流及び「親睦の輪」を深めています。(民家園のつどい、四名含む)

自然に恵まれた広い民家園内にある古い民家建築及び民俗文化財(昔の民具等)にも触れ、明治時代の劇場建築が反映されている旧広瀬座公演での鑑賞会を振り返ると、次に通りであった。

平成十六年度「乙女文楽」公演：艶容女舞衣「義経三本桜」など三味線と浄瑠璃とが一体となって古典人形を操っての伝統芸能は、優雅で美しい女性らしさを演じ、会員からも大好評であった。

平成十七年度「狂言」公演：室町時代に成立した伝統芸能で、善竹十郎が大道具も無く、演技と声音で見事に場面を描き出し、観客から笑いを誘う「柿山伏」など、狂言の魅力が大いに伝えられ好評であった。

平成十八年度「下町かぶき組」公演：座布団敷き拵席での人情時代劇(涙の演劇・華やか舞踊)は、悲喜こもこも連続の芝居が演じられ、「笑いと涙」誘う公演は、会員からも大喝采を受け、好評であった。

平成十九年度「懐かしの映画会」上映会：旧広瀬座では「嵐を呼ぶ男」・「キューポラのある街」・当時の「ニュース」が上映され「懐かしの映画会」

は、会員からも好評の映画鑑賞会であった。

平成二十年度「琴」演奏会：地元出身の遠藤千晶さんによる和の世界「飛翔」が演奏された。拵席での「琴の音色」に聞き惚れ、また「琴と尺八」合奏のパワーによって、感動を伝える演奏会は会員からも好評であった。

平成二十一年度(旧広瀬座屋根改修工事のため公演中止)

平成二十二年度「みちのく邦楽オーケストラ」公演：一部は浅野祥の三味線と和太鼓、二部は三味線とドラム・ベース・ピアノの合奏は、旧広瀬座内に鳴り響き、大きな感動を会員へ伝える演奏は好評であった。

平成二十三年度「堀江美都子ハートフルライブ」公演：お馴染みのアニメソングを通し、旧広瀬座の芝居小屋としての魅力が伝えられた。公演後、食事処「室石」では昼食兼座談会により、会員との交流をはかった。

公演終了後、座談会では、明治・大正・昭和の三代にわたる大衆娯楽殿堂として歩んだ、歴史ある旧広瀬座公演での鑑賞会及び古民家・古民具等を間近に触れた体験によって、先人から受継がれた民俗文化財「生活の伝承」に対する興味・関心が深まり、会員との交流の場が広がったなど、好評との感想が多かった。

また、旧広瀬座付近へのトイレ整備・シニア世代の団体割引等によって、入場者数も増えるのでは?との意見もありました。

終わりに、民家園内の多くの文化財について、保護・保存及び普及・啓発とともに、祖先の残した「生活の伝承」を後世に伝えていく大切さを改めて認識し、本会の同期生団体による旧広瀬座公演での鑑賞会が、今後とも継続しながら、民家園での「市民の輪」が広がって行くことを期待しています。



夢春二座長を囲んで…公演鑑賞会

# 福島市内の「狼」の地名・ほか

太田 隆 夫

このごろ、福島市内には棲息していないといわれていた、イノシシが出没して、田畑の作物を荒しまわっている、という噂を耳にしたりします。

福島県内で、イノシシが棲息している被害の多い地域は、阿武隈山系の東側の浜通りから県南地方といわれてきました。

それがイノシシの繁殖が広がって、とうとう県北の福島市の大波や山口地区、そして阿武隈川を西岸にわたり、松川町の沼袋や金沢あたりまで、その勢力を伸ばしてきているようです。

このイノシシが、各地にはびこるようになったのは、天敵のニホンオオカミが、明治三十八年（一九〇五）一月を最後として、日本の土地から絶滅してしまったのが、原因だとする説もあります。

イノシシと同じように数を増やしているのにニホンジカ（北海道ではエゾジカ）があります。ニホンオオカミが皆無なので、尾瀬ヶ原の貴重な高原植物や、新しく植林した山地の若い苗木など、この鹿の食害が、環境問題となっていること、皆さますでにご承知のことでしょう。

それで、私のこの拙稿は「イノシシ（ニホンジカ）の食害」のことではなくて、「ニホンオオカミ（狼）について」、福島市内に残っている面影を尋ねたのを少し、という次第です。

そのむかし、福島市内にもニホンオオカミが棲息していた。その名残りを追跡するとき、一番の近道は「地名」ではないかと思われまふ。この地名が、ニホンオオカミがいたことを伝える、手がかりとなっているのです。

福島市内にある「狼に係する地名」で、広く知られているのは福島市松川町の水原地区にある「狼ヶ森（おいがもり）」でしょう。

ここは、松川町の「旧八丁目宿」の町並みから西方へ、土湯温泉につづく県道の奥まった地点、水原川の川沿いの場所の集落です。近年は、地域おこしのイベントで、花どきは賑わう「水原のクマガイソウ祭り」の現地への入口に当ります。

水原川をはさむ南側は、「狼ヶ森向い（おいがもりむかい）」の地名で、「ク

マガイソウ群生地」は、この林道を南方へしばらく進みます。林道を入ると右側の広場があり、この場所が、かつては「水原小学校狼ヶ森分校」があったところだ。

いま思いますが、ここで学んだ子どもたちにとって、「狼ヶ森分校」という名前と、地域の幼い児童の表情の対比から、私は個人的に「凄い」と感じたりしています。

分校の名前はまた、「宮澤賢治の童話のなかに登場するような印象も受けま

す。そして福島市内にある「狼の地名」では、阿武隈川の東側にある渡利地区に「狼ヶ窪（おおかみがくぼ）」があります。

さらにこの地区から阿武隈川に沿って北方へ行った、同じく川の東側にある岡島地区に「大成ヶ森（おいがもり）」という、変わった文字の地名があります。

こうした文字の列は、「狼」のことを「大神」「大上」と表示したり、「オオカミ」「イヌ」と呼ぶ土地から「大夫」「男犬」の文字を当てる地方もあるといわれています。このことから岡島地区に残る地名は、オオカミの意味として考えられるようです。

岡島地区から東南へ山を越えた、市内大波には「笈ヶ森（おいがもり）」があります。「笈」というものは、『おくのほそ道』紀行で、芭蕉が福島市飯坂町平野の古刹医王寺で読んだ「笈も太刀も五月に飾れ紙のぼり」の「笈」み

たいです。修験者や行脚僧が、仏具、衣類など入れて背負う箱みたいですが地名は「おいがもり」で、水原地区の「おいがもり」と、発音が全く同じですから、大波の地名もオオカミを指していることばと考えられます。

そして市内松川町浅川には、「狼久保（おおかみくぼ）」があります。前述の渡利地区にある「狼ヶ窪」と同じような地形からつけられた地名だと判ります。

福島市小田地区には、オオカミの棲息地だったことを正直に伝えその群れの状態を想像できる、そのものずばりの「狼山（おおかみやま）」の地名があります。

県道の福島く水原線を、市内大森を経由して南へ行き、小田の「遅沢（お

そざわ)「集落から右への道を入り、真つすぐ西へ向うと雑木林が広がる地点です。福島市クレー射撃場は、この右側へ尾根を越えた位置にあります。

阿武隈川の支流の一つ、「濁川(にごりかわ) 明治以前は永井川の名称」の水源地のある山でもあります。

こうした「オオカミ」の名前がついている地名は、どれも田畑がひろびろとしていた平地や、その中に点在する集落や場所ではなく、人里から離れた山深い位置、ときどき焚木とり、用材の伐採にだけ行く、奥まったところという地形が多いみたいです。

その地名のところへ尋ねて行くと、確かにニホンオオカミの群れが棲んでいたような、林相となっている山や凹地です。「狼」の名をつけたことが、すぐ納得できるようです。

最近では、薪や柴木も採取(柴切り)もなくなったから、人里深い雑木林も、単純に踏み込めないほど、ものすごく荒れてしまっていて、今こそニホンオオカミの棲家として復活する場所にふさわしい状態があらこちの山に多いのです。

時代は遡って、いまから二百一十年前の享和元年(一八〇一)の四月十五日、福島藩主板倉氏八代勝長の時代で、福島藩領だった山口村(現福島市山口)で、オオカミが捕えられたことが、史料に登場しています。

「山口村徳三郎、荒出候狼を打取候二付、青指(銭) 壱貫文被下之」(『政事集覧』・福島市史資料叢書 第六十集 二六八ページ) という記録です。

山口村の徳三郎という者が、暴れて出てきたオオカミを「打取った」ので、藩の方から報償金の形で、「金壱貫文」下された、という次第です。

二百一十年前の山口村には、このようにニホンオオカミが棲んでいて、山から出てきたところ、徳三郎という者に打取られました。徳三郎は「打取った」とあるので、鉄砲使い(獵師)を副業としていた人物だったでしょうか。この市内山口地内には、河原左大臣源融の「百人一首」で知られている和歌の枕ことばと、『おくのほそ道』で芭蕉と曾良が訪れたという、有名な文知摺観音があります。

この境内には、文知摺石(鏡石)、綾形石、人肌石など、名前のある石が散在しているなかの一つに、「夜泣き石」というのがあって、次のような物語が伝えられています。

むかしこの近くの「一軒の家」に、夫婦と子ども一人が住んでいたが、あるとき父親は家を出て稼ぎに行つたまま、二年たつても三年たつても帰つて来なかつた。母親は夫に代つて一所懸命働いたため、病気で死んでしまった。

一人残された子どもと、或る夜狼が来て連れて行かれ、山の中で狼に育てられていた。

成長した子どもは親が恋しくなり、自分の家の場所へと山をおりて、狼の棲家には戻らないでいた。それで狼は、その子を迎えに山から里へ出てきたところ、子どもは大石のところ倒れて、死んでいたという。

それを見た狼は悲しさのあまり一晩中、石の上で吠えつづけ、朝に山へ帰つていったが、それからというものは、夜ごと大石の上で吠えつづけたので、村の人たちは、この石を「夜泣き石」と呼ぶようになったと伝えられています。

この伝説は、オオカミでなくキツネだとする説もあるのですが、「狼に育てられた女の子」なんて、インドあたりの実話もありますので、私はニホンオオカミに味方して、山口村の少年を育ててくれたのは「狼」だったと信じています。

それから福島市飯坂町茂庭の梨平地区の御嶽神社境内には、「三平山の神」という石宮があります。

この石宮にも物語があつて、この附近で暴れまわっていた狼を、三平という者が捕まえようとしたところ、狼は強くてなかなか取り押えられず、仲間に応援してもらつて、ようやく狼を止めることが出来た。

でも三平はこのあと、狼に噛まれたことから病気になるって、間もなく死んでしまった。村の人たちは三平の魂を慰めるとともに、狼の祟りをしずめるために、両方を祭神に祀つて「山の神」の石宮を造つた、という伝承があります。

各地に散在する「山の神」には、山容そのものを恐れ、山の恵みを祈念して神とした事例のほか、山に棲むオオカミを退治したあとオオカミの霊を神に祀り、オオカミの復讐・祟りのないように「山の神」として礼拝した例が伝えられています。

最後に、福島市の土湯、荒井、水保地区の口頭伝承として、「供養山の狼のはなし」というのが、『福島市史 別巻Ⅳ』福島の民俗Ⅱの五四四ページに収録されています。機会がありましたなら、ぜひご参照ください。

## 「ふれあいの中で感じたこと」

福島学院大学 一年 大河内 瞳

一年の中には、お正月、節分、ひな祭り、端午の節句、七夕などたくさん行事があります

が、現在ではその行事の由来を知らなかったり、

行事を簡単に済ませてしまったり、行わないという人も多くいると思います。私もその一人で

した。小正月にだんごさしをしたり、節分に鯛の頭をさした豆枝と柗を飾ったり、お盆に牛なす馬きゅうりを飾ったりということ、私の家では行っていませんでした。民家園の年間行事に参加してそのことに気づき、多くのことを学びました。

また、民家園では行事だけではなく昔の生活を体験しました。昔の食事や囲炉裏の使い方、米ぬかを使つての床掃除、繭から糸をとること、石うすで麦を挽くなど、私にとってはどれも初めてのことでした。今では、便利なものが増えているいろいろなことが楽にできますが、昔は暖をとるにしても、ごはんを食べるにも時間がかかり、たくさん苦労があったようです。だからこそ、いろいろな知恵やアイデアが増えていったのだと感じました。

民家園での体験で感じたことは、つどいの会やその他のボランティアの皆さんの偉大さです。

だんごの作り方や、糸とりの作業や機織り、囲炉裏に火を入れる作業などいろいろなことを知っていて、教えていただくことがたくさんありま

した。だんごを作る時でも、お湯の入れ方やこね方にコツがあり、少し失敗してもすぐに対応していただいても心強かったです。繭から糸をとるときは、煮た繭から出た糸を次々に集めて一本の糸にしていく作業が熱さを感じさせないほど手早く、とても驚きました。

私が民家園でのボランティアに参加するまで知らなかったことが多くあったのは、改めて行事に触れ合う機会がなかったからだと思います。自分の家で行っていることがすべてだと思っていたので、たくさん先輩のもとで、日本の文化でもある行事を学べて本当に良かったと思います。そしてこれからも、地域の方と関わる機会を増やして、もっともっと日本の文化に触れ、その経験を大切にしていきたいと思っています。



昔の一日より

# 東日本大震災とその後の福島市民家園

(財)福島県都市公園・緑化協会

企画課 主査 三浦俊樹

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分、その時私は民家園事務室に居りました。

事務室内で打ち合わせを行っている、携帯電話の地震警報が鳴り出し「あっ、地震が来る」と思った次の瞬間、今まで感じたことのないような強い揺れが襲ってきました。事務室内では危ないと、とつさに思い事務室外に出てみると、そこから見える旧佐久間家板倉が尋常ではない、今にも崩れるのではないかとというような揺れ方をしていました。

地震発生時、園内には見学者も居りましたが、強い揺れがなかなかおさまらず、園内の確認にもなかなか動くことができずに、ただ揺れがおさまるのを待つことしかできませんでした。

その強い揺れもおさまりはしましたが、まだ余震が続く中、園内の見学者が負傷していないか、また、各古民家の状況はどのようになっていたのか確認へと走りました。各古民家内一軒一軒で声をかけながら確認して回りましたが、幸いにして見学者に負傷した方もおらず一安心しました。

しかしその後は、福島市文化課、体育館事務室へ連絡しようとしても、一般電話は停電のために繋がらず、携帯電話も繋がらない状態、サイクルスポーツ広場へ走り内線電話で体育館へ民家園の状況を伝えると共に、体育館の状況確認、体育館は安全確認のためしばらくの間閉館の措置を取ったこととで、民家園も閉園の措置を取りました。

十二日朝からは、民家園内の被害状況確認を行いました。昨日は気が付かなかった古民家への影響が見つかりました。旧小野家裏のワイヤーが切れ、各古民家では土壁の亀裂や梁のずれなど多数見受けられました。しかし、市内では屋根瓦が落下し、中には倒壊してしまふ家屋もあったにもかかわらず、民家園内各古民家は倒壊することなく先人の建築技術がいかに素晴らしきものであったかを改めて感じさせられました。

震災後は、見た目こそ大きな損傷はなかった各古民家ではありますが、見学者の安全を確保するためにも専門的な強度確認及び補修の必要性があったため、六月末までの閉園を余儀なくされました。その間、年中行事を始めF O R R E S T、自主事業イベント等が中止になってしまいましたが、一般の方々より「民家園は大丈夫だったのか」または、「いつから見学が出来るようになるのか」など多数のお問い合わせをいただきました。いかに民家園が市民の皆様様に親しまれているか改めて分かりました。

七月一日の再開園、そして二日には早速、年中行事「たなばた」体験行事「おりがみ」多くの来園者にご参加いただきました。特に子ども達の参加が多かったことにはホッとしました。

しかし、福島市でも西に位置し、放射線の線量も低い場所ではありますが、県外からの観光客が減少し、入園者数が激減しているのが現状です。一刻も早い福島の復興のためにも、民家園の風情に合ったイベントの展開や、広報活動に力を入れ、賑わいのある民家園づくりに努めていきたいと考えております。どうぞ今後とも変わらぬご協力をいただけますようお願いいたします。



旧奈良輪家裏 土壁亀裂状況



体験行事「おりがみ」



佳作  
「脱穀体験」  
小田島 守明



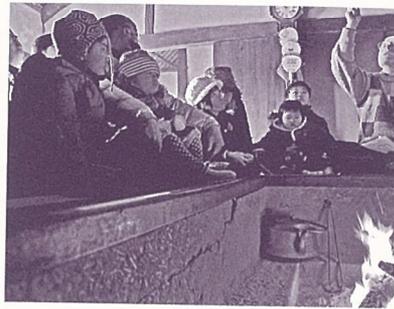
特別賞  
「御神火で餅焼き」  
伊藤 松男



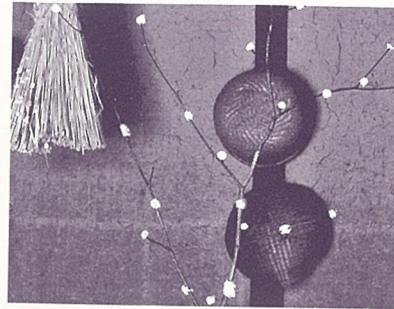
優秀賞  
「昔話し」  
佐藤 光政



佳作  
「晩秋民家園」  
渡邊 源一



佳作  
「昔の家で昔ばなし」  
長谷部 進



佳作  
「小正月」  
清野 欣子

第5回公園フォトコンテストにおいて、民家園関係の写真が340点中、6点入賞しましたので、ご紹介いたします。